

六波羅蜜寺 伝平清盛像、その像主をめぐる

岩田茂樹（当館学芸部長補佐）



（写真1）

昭和四十七年（一九七二）のNHK大河ドラマは「新平家物語」であった。主役の平清盛を演じたのは名優仲代達矢である。数年後、初めて京都・東山の六波羅蜜寺を訪ね、平清盛像と伝える等身大の僧形坐像（写真1）に出会った。収蔵庫で拝観の際、寺の職員の方が「どうです、仲代さんに似てるでしょう？」とおっしゃったことをよく覚えてい

る。似てるかどうかよくわからなかったが、その後浄土教の美術を勉強するうちに、清盛像であるということに疑いの念を抱くにいたった。その理由について、略述してみたい。

像容をながめよう。袈裟をまとう僧形像で、胸前で経巻を広げる。胸もとを大きくはだけ、鎖骨や肋骨の浮き出た肌を見せる。視線はあらぬ方向に向けられ、唇は垂れ

気味で、生気のない、特異な相貌である。

詳述の余裕はないが、写実的なその作風から、鎌倉時代前期の作とみなすのが大勢であろう。とすると、本像を清盛像とみることはかなり困難になる。

第一に、本像を清盛の出家入道後の法名である浄海の像と記す文献は、『山州名跡志』などの江戸時代の地誌のみで、より古い史料には見いだせない。第二に、鎌倉時代前期の六波羅の地の状況である。清盛の病没は養和元年（一一八二）、二年後の寿永二年（一一八三）に平氏は都落ちを余儀なくされ、文治元年（一一八五）には壇ノ浦の合戦に敗れ、滅亡する。かつて平氏・門の邸は六波羅の地に広がっていたが、源頼朝と鎌倉幕府の覇権が確立すると、六波羅の地は彼らの手に帰した。そのような時期に、仇敵平氏の総帥であった清盛像の造立・安置がはたしてありえたであろうか。

本像の造立を平氏滅亡以前とする見方もありえなくはないかもしれないが、その場合、別の疑問が浮上する。



（写真2）

上記したように、本像は袈裟こそまとうが、胸をはだけ、僧侶としての正装には程遠い姿である。とらえどころのない表情も合わせると、太政大

臣という人臣の極位を経た人物の肖像としては、あまりにも破調といわざるをえない。

次に、南北朝時代の制作になる宮内庁三の丸尚蔵館保管の「天子撰関御影」（写真2）という絵巻がある。似絵の名手として知られた藤原隆信・信実の末裔である為信・豪信の手になるものとされるが、すでに指摘のあるように、そのなかに描かれる清盛像は、本像とは似ても似つかない顔立ちなのである。

中世に成立した『高野山往生伝』や『撰集抄』のような仏教説話集を読んでいると、ほとんど無名だが、何らかの奇瑞によつてまちがいに往生を遂げたと信じられた聖たちがしばしば登場する。そのなかに、往生、すなわち死の瞬間の姿を、あるがままに肖像画ないし肖像彫刻として写しとるという事例が散見する。ときには髪が長く伸びていたり、粗末な破れ衣の姿であったり、また舌が垂れ下がっていたりする。まったく一切の美化は行われない。

その肖像制作の目的は、あくまで礼拝結縁のためのものであった。人々は先を争つて群集し、手を合わせ、拝み、その往生者の力による引導、つまり極楽浄土へ迎え入れられることを期待したのである。本像はそのような往生者の肖像ではなかったか。このように見るとき、本像の特異な表情や服制が謎ではなくなる。制作当時はその往生が人々の間で噂となつたが、もともと身分が高いわけでも名の知られた高僧でもなかった無名の聖の像である。いつしか実名は忘れ去られ、往生の一瞬を留めた姿だけが、八百年後の今日にまで伝えられた――筆者はこのような解釈をしている。